

4. 湖産アユ種苗性向上試験研究費

1) アユ種苗の飼育成績（1995年）

酒井明久・遠藤 誠・二宮浩司

【背景】琵琶湖産アユ種苗の弱体化が問題となっている。

【目的】1995年のアユ種苗を飼育し、時期、漁法ごとに歩留まりの実態を把握する。

【成果概要】

1. アユ種苗の飼育方法はつぎのとおりとし、飼育開始後3週間の生残率を調べた。

飼育池 : 1.2㎡（水量600ℓ） 飼育用水 : 地下水（19℃）

種苗収容量 : 1.2～1.5kg 収容時塩分濃度 : 0.7%

換水方法 : 1回／日（収容当日） 2回／日（1日目） 12回／日（2日目以降）

2. 12～3月の種苗については冷水病予防対策としての高水温処理（図1-a）を行い、同様に生残率を調べた。

3. アユ種苗の飼育成績はつぎのとおりであった。

(1)12月期えり漁獲種苗（図1-b）：2週間目までに著しい生残率の低下はなく、70%以上であった。対照区では20日目以降に生残率が低下しはじめたが、原因は不明であった。

(2)1～2月期沖曳網漁獲種苗（図1-c, d）：えり漁獲種苗に比較して収容直後の生残率の低下が大きく、1月期の種苗では2日目までの生残率は約60%であった。また、2月期の種苗では高水温処理中に著しく生残率が低下した。

(3)2～6月期えり、やな漁獲種苗（図1-e～i）：収容直後には著しい生残率の低下はみられなかった。7日目以降には冷水病による斃死から生残率は著しく低下し、21日目の生残率は2月を除き50%以下であった。一方、2月、3月期の高水温処理区では斃死は少なく、21日目の生残率は90%以上であった。

【成果の活用】沖曳網漁獲種苗では収容直後あるいは高水温処理時に著しく生残率が低下する場合があることから、この原因を明らかにし、対策を検討しなければならない。

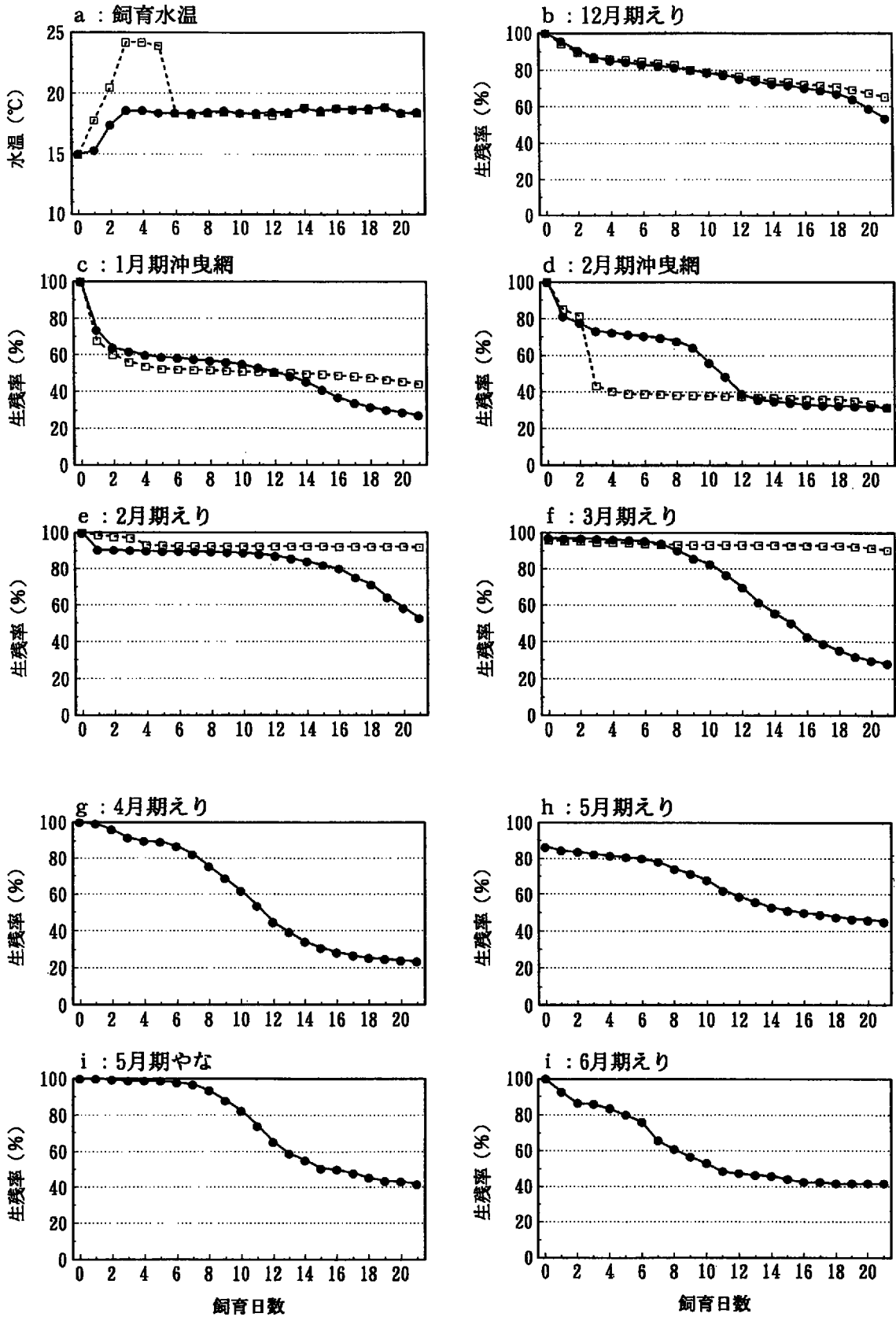


図1 飼育水温とアユ種苗の月別生残率。
 無処理の対照区 (—●—) と冷水病予防の高水温処理区 (---□---)。
 飼育水温は3月期えり漁獲種苗の飼育水温を代表に示した。